



今のニッポンに待たれる 根性論の復活!?



有賀克彦 Katsuhiko ARIGA

物質・材料研究機構 WPI-MANA 主任研究者, 東京大学新領域創成科学研究科 教授

現在心を痛めるのは、日本の科学力の衰退という話である。発表論文数やトップ論文の世界におけるシェアの減少という統計データから、諸外国に比べて遅れを取っているとメディアに言われる。まるで、世間が科学者を責めているようである。一方、実際の学会やシンポジウムで生きのいい研究者の話の話を聞くと、素晴らしい、イノベティブな研究が次々になされているように感じる。日本の科学者が秘めている可能性の火は衰えていない。自虐的にそれを消そうとしてはならない。では、論文数が伸びないのはなぜか？日本の科学者を取り巻く環境の悪化、研究費の問題、研究時間の問題、その他もろもろ研究者の足を引っ張る要因が議論されている。それは事実で、絶対に解決しなければならない問題である。ただ、それはそれ相応のプロセスで解決すべき問題である。個々の研究者が、それらの問題を研究成果や論文を出せない理由にしてはならないと思う。論文数に影響を与える直接的な要因は、研究成果を出すこととその論文を出すことそのもの以外にはない。研究費や環境の問題は間接ファクターにしすぎない。研究者に必要なことは、いかに素晴らしい研究成果を出して論文を書いていくかである。この単純な答えしかない。

そこで、提案したいのは、根性論の復活である。もちろん、これは他人に対してパワハラまがいに根性を無理やり注入するのではなく、自分自身に対する根性論である。すぐには解決できない周囲の不備に不平を漏らして歩みを止めるのではなく、今ある研究に対する情熱を最大限燃やして、研究に邁進する熱い心を持つ。もちろん、合理的な時間の使い方や論文作成のテクニック論は必要である。それをうまくできる人もいるしそうでない人もいる。そんな考えに縛られることなく、もっと単純に力づくでできることを考えたほうがいい気もする。誰にでもできることは、熱い心をもって研究に打ち込むことである。経験上、「研究成果を出す」、「論文を出す」、「その論文が評価される」ということは、それにかけた努力によく相関する。研究の世界では、努力の程度がその成果に正直に反映される。2倍努力すれば2倍の成果が得られる健全な世界に我々は住んでいる。どんなことがあっても、自分の研究に自信を持ち、今にもまして研究の情熱を燃やして頑張っていこうではないですか。もちろん、本誌の読者の方々は研究に邁進する人ばかりであろう。なので、私のようなものがこんな根性論を皆さんに向かって書いているのは間違いかもしれない。ただ言いたい。個人が今よりもさらに根性を発揮して研究成果を出し、論文を出していけば、世間の流れも変わる。たくわえられている研究の火が大きな炎になる。必ず最後に愛が勝つ。最後に情熱が勝つ。単純な努力の心が勝つ。私はそう信じる。

© 2023 The Chemical Society of Japan